

# イギリスにおけるユニテリアン主義： プリーストリに焦点を当てて

江口 誠

## 1. はじめに

宗教改革というキリスト教の大きな転換期の過程で、17世紀以降のイギリスでは、ユニテリアン主義(Unitarianism)と現在呼ばれているキリスト教の新たな信仰が徐々に浸透していった。キリスト教では、父(神)、子(キリスト)そして聖霊という三つの「位格」(Persons)を一つの実体として認識する教理がある。ユニテリアン主義とは、その呼称が示す通り、「神を三位一体(trinity)としてではなく、唯一のもの(unity)として捉える信仰」である<sup>1</sup>。18世紀イギリスにおいて、このユニテリアン主義の浸透に大いに寄与したのがジョーゼフ・プリーストリ(Joseph Priestley, 1733-1804)であった。彼は、キリストの死後から紀元2世紀前後までのキリスト教である「原始キリスト教」(Primitive Christianity)を「自然宗教」(natural religion)、もしくは「原始宗教」(primitive religion)と認識し、彼が考える理想のキリスト教の姿、つまりユニテリアン主義の源をそこに見いだしたのである。

イギリスにおけるユニテリアン主義の歴史を理解する上では、まず大陸のユニテリアン主義の歴史、とりわけ三位一体論についての議論や受容について概観する必要があると思われる。その上で、後述するプリーストリが理想とする原始キリスト教に関して考察することが可能になると考える。

従って、次節では、まずヨーロッパにおける宗教改革とユニテリアン主義の始まりとその広がりについて概観する。続いて、17世紀イギリスにおけるユニテリアン主義の受容について考察し、最後にプリーストリの様々な著作から、彼が考える理想のキリスト教の姿について明らかにしたい。

## 2. 三位一体論とヨーロッパのユニテリアン主義

16世紀までのローマ・カトリック教会の体制に強く反発したマルティン・ルター

(Martin Luther, 1483-1546)による宗教改革は、1517年の『九十五ヶ条の論題』が出发点だと考えられる。この書は、ラテン語で書かれ、後にドイツ語に翻訳されて瞬く間に広まった。その象徴的な第1項と第2項は、以下の通りである。

- 1 私たちの主であり、また教師であるイエス・キリストが「悔い改めの sacramentを受けよ」と宣言したとき、イエス・キリストは信じる者たちの生涯のすべてが悔い改めであることを願った。
- 2 その言葉が(司祭が職務上行う告解と贖罪としての悔い改め、すなわち sacramentとしての悔い改めを指している)と理解することはできない。<sup>2</sup>

注目すべきは、信者が「悔い改める」のはあくまで信者自身の内的な作用であって、教会や司祭が「sacrament」と称して媒介するような行為ではないという点にある。当時のカトリック教会は、例えば罪を犯した信者たちに対して、「贖宥状」(indulgence)と呼ばれる証書を販売し、sacrament、即ち「秘跡」(sacraments)によって、ある意味容易に罪が赦免されるという習慣が罷り通っていた。ルターは聖書を媒介とした神と信者との直接的な結びつきの重要性を強調しつつ、カトリック教会の伝統的な特権的かつ中央集権的なシステムを批判したのである。

しかしながら、ルター、さらにはフランスからスイスに逃れた宗教改革者ジャン・カルヴァン(John Calvin, 1509-1564)とカトリックが共通して堅持していた教義があった。それは、三位一体論であり、具体的には6世紀頃からキリスト教会で使われるようになった「アタナシオス信条(Athanasian Creed)」に定義されている<sup>3</sup>。因みにアタナシオス(Athanasius of Alexandria, c.298-373)とは、古代ギリシャ教会の教父の一人である。この信条にはアタナシオスの名前が付されているものの、実際に彼自身が作成したものではない<sup>4</sup>。この信条は大きく序文(1-2)、第1部(3-26)、第2部(27-39)、そして結論(40)の4つに分けられ、その第1部に三位一体論への言及がある。中でも最も象徴的な第3節から第6節を以下に引用する。原文はラテン語であるが、以下は英訳されたものであり、参考までに私訳を付す。

3. And the Catholic Faith is this: That we worship one God in Trinity, and

Trinity in Unity;

4. Neither confounding the Persons: nor dividing the Substance [Essence].
5. For there is one Person of the Father: another of the Son: and another of the Holy Ghost.
6. But the Godhead of the Father, of the Son, and of the Holy Ghost, is all one: the Glory equal, the Majesty coeternal.<sup>5</sup>
3. カトリックの信仰は以下の通りである：三位一体の一神を崇拜し、三位一体とは単一体である。
4. 位格を混同しない：さらに実体[本質]を分離しない
5. というのも、父の位格、子（つまりキリスト）の位格、そして聖霊の位格があるからである。
6. しかしながら、父の神性（神格）、子の神性、そして聖霊の神性は一体であり、その栄光も等しく、その尊厳は共に永遠である。

つまりは、神、キリスト、そして聖霊という 3 つの「位格」(Persons)を本質的には一体として神を認識するという考え方である。しかしながら、ラテン語で言うところのペルソナである「位格」という概念の理解が非常に困難である。この「位格」という語は、ラテン語では「人の所有物や地所」という概念と「舞台演出」を指すものであったようで、後者は、異なる役柄を演じる仮面をつけ、違う人物を演じ分けるというものだった<sup>6</sup>。さらに、「三位一体」(Trinity)という用語そのものについては、実際には新約聖書には登場せず、キリスト教神学者であるティトゥリアヌス(Tertullian, 155-220)によって初めて使われたと考えられている<sup>7</sup>。この教義は、神、キリスト、そして聖霊は異なる存在であり、キリストと聖霊は神に従属する存在であると考えられる従属主義(subordinationism)などの主張と真っ向から対立しつつ、様態論(modalism)として多くの論争の中で数世紀に渡って徐々に発展してきたものでもある。その議論が最高潮に達したのが、4世紀初頭のいわゆるアリウス論争(Arian controversy)であったが、この論争の詳細については後述する<sup>8</sup>。おおよそその三位一体の考え方が確立した後も、例えばアウグスティヌス(Augustine of Hippo, 354-430)は、自著『三位一体』に自身の考えをまとめ、存在論的ではなく、人間の精

神との関係から論じているのが特徴である。彼は神の実態を愛として認識しており、愛するもの、愛されるもの、そして愛そのものという 3 つの側面から三位一体を説明しようとした<sup>9</sup>。

さて、この三位一体論(説)は、325 年のニカイア公会議(the Council of Nicaea in 325)に続いて 381 年に開催された第 1 回コンスタンティノープル会議(the First Council of Constantinople in 381)で規定された。この間に、後述するアリウス派の主張、つまりキリストは父なる神と同等に共存する存在ではなく、父なる神とは異なる、即ちあくまで従属する存在であるとする主張が公的に退けられ、異端となったという経緯がある。

この伝統的な教義に強く反発したのが、アラゴン王国(現スペイン)出身とされる 16 世紀のミシェル・セルヴェ(Michael Servetus, 1511-1553)であった。彼はフランスで法律を学んでいたが、そこで目の当たりにした教会の墮落した姿に憤慨し、その怒りは三位一体の教義に向けられた。彼は 1531 年に匿名で『三位一体の誤謬について』(*De Trinitatis Erroribus. / On the Errors of the Trinity.*)という小冊子を出版した。以下はその英語訳からの抜粋である。

30. The philosophers have invented besides a third separate being, truly and really distinct from the other two, which they call the third Person, or the Holy Spirit; and thus they have contrived an imaginary Trinity, three beings in one Nature. But in reality three beings, three Gods, or one threefold God, are foisted upon us under the pretense and with the names of a unity.... and all these three are shut up in one jar. I, however, since I am unwilling to misuse the word Persons, shall call them the first *being*, the second *being*, and the third *being*; for in the Scriptures I find no other name for them....

.... It is clear, therefore, that we are Tritoiters, and we have a threefold God: we have become Atheists, that is, men without any God.<sup>10</sup>

セルヴェによると、哲学者らが、1 つの本質の中に 3 つの存在を持つ、想像上の三位一体なるものを考案したが、それは実際には 3 つの存在、3 つの神、もしくは

3部からなる1つの神が装いを持ち、さらには統一という名の下に我々に押しつけられている、というのである。聖書の中のどこにも書かれていない位格(Person)という名称によって神が3つの存在に分割されており、それを信じるということは無神論者であることと同義であると述べ、1つの神の中に3つの存在を区別する行為を痛烈に批判している。またセルヴェは、別の箇所では、このキリスト教徒の解釈は一神教であるイスラム教徒やユダヤ教徒からの嘲笑の対象にもなっており、さらにはギリシャ哲学者たち(philosophers)によって考案された疫病(plague)であると主張している。ここでいうギリシャ哲学者たちとは、上述のアタナシオス信条を考案した者など、三位一体論の発展に寄与したギリシャ教父(パトレス、Patres、Church Fathers)を意図しているのではないかと思われる<sup>11</sup>。結局のところ、セルヴェは別の書物の出版の際に名前が知れ渡ってしまい、自身の主張に反する者たちを徹底的に取り締まった不寛容なカルヴァンの思惑どおりに、異端者として投獄されて有罪となった<sup>12</sup>。そして、ついには火刑で焼死する、という非業の死を遂げる。

セルヴェ以降の「異端者」については、例えばフランスの神学者で、一時はジュネーヴでカルヴァンに従事していたこともあるセバスチャン・カステリオン(Sebastian Castellio, 1515-1563)が挙げられる。彼は異端者らの主張を集約した『異端者について』(*De haereticis, an sint persequendi. / Concerning Heretics.*)を1554年に出版し、処刑という処遇に疑問を呈する。ドイツの神学者カスパー・シュウェンクフェルト(Caspar Scwcnckfeld, 1489/1490-1561)は、セルヴェの思想と共通しており、キリストは人であり、神の子であるなどと主張した。

やがて各国で散発的に発生していた反正統主義思想が、トランシルヴァニア及びポーランドにおける2つの宗教運動に収斂されていく。その内の1つは、ルーマニアの中央部から北西部トランシルヴァニア(1543-1691)におけるユニテリアン協会の創立であった。トランシルヴァニア王のヤノーシュ2世(ヤノーシュ・ジグモンド、János Zsigmond Zápolya / John Sigismund Zápolya (Szapolyai), 1540-1571)は、国内での宗教対立を収めるために、1568年に「トルダ(トゥルダ)の勅令」(Edict of Torda / *tordai ediktum*)と呼ばれる宗教寛容令を出した。これによって、思想によって投獄されたり、あるいは地位が剥奪されたりするという事がなくなり、

ユニテリアン派についても、議会で容認された 4 宗派(カトリック、ルター派、カルヴァン派及びユニテリアン)の 1 つとなり、その信仰の自由が許された。1571 年にはユニテリアンは約 500 の集会を開くなどしてその隆盛を極めたが、ヤノーシュ 2 世が同年に亡くなると、ユニテリアン派の代表的人物であったダーヴィド・フェレンツ(Dávid Ferenc / Ferenc Dávid, c.1520-1579)が、1579 年に刑務所で殉教する。なお、「ユニテリアン」という呼び名については、1600 年にトランシルヴァニアで最初に使用されているが、三位一体説の信仰者を指す「トリニタリアン」(Trinitarian)に対して神の唯一性を信仰するという意味で用いられたという説と、1568 年の「トルダの勅令」で認められた 4 教会の「ユニティ」(unity)を表すという説がある。

さてもう一方の宗教運動は、1556 年にポーランドのピーター・ゴネシウス(Piotr of Goniądz / Peter Gonesius, c.1525-1573)による説教が契機となった。カルヴァン派内部から反三位一体派が独立して小改革派教会(Minor Reformed Church of Poland, 1565-1658)を設立し、その信者らはポーランド兄弟団(Polish Brethren / Bracia Polscy)と呼ばれていた。彼らはキリストの教えを忠実に守り、理想的なコミュニティをピンチュフ(Pińczów)とラクウ(Raków)に形成し、後者にはソツィーニ派(Socinians)の学校(Racovian Academy, 1602-1638)を設立した。これらの教会に招かれたのが、イタリアのファウスト・ソツィーニであり、彼を中心に 1605 年に『ラクウ教理問答集』(Racovian Catechism / Katechizm Rakowski)なるものが編纂された。1652 年、イギリスでは『ラクウ教理問答集』の改訂版が市中に出回り、議会で審議されることになった。因みに熱心なピューリタンとして知られ、クロムウェルのラテン語秘書を務めていた革命派の詩人ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-1674)がこの書籍の出版許可を与えていたという事実があり、その行為については反三位一体説の論文を執筆した彼の思想とも関係しているという考えもある<sup>13</sup>。この中で強調されているのは、三位一体、キリストの神性、精霊の神性、キリストの贖罪、そして原罪の教義の否定などであり、当時の議事録によれば、この本は「実に冒瀆的で、誤謬に満ち、かつ中傷的な内容を含んでいる」として、議会決議によって、それら全てが没収され焚書処分となった。このラテン語版の『ラクウ教理問答集』が焚書処分となった約 3 ヶ月後に、イギリスにおいて英語の翻訳版が出版されている<sup>14</sup>。

### 3. 17世紀イギリスのユニテリアン主義

このように、ポーランドにおいて三位一体反対論、いわゆるソツツイーニ派の勢いが強かったが、オランダとイギリスにおいてもこの宗派の教義は強い影響を与えていた。「ソツツイーニ派」(Socinianism)という名称は、イタリアの神学者レリオ・ソツツイーニ(Lelio Sozzini, 1525-1562)と甥のファウスト・ソツツイーニ(Fausto Paolo Sozzini (Socini / Sozini) / Faustus Socinius, 1539-1604)の名前から取られたものである。ここで反三位一体論として頻出する各宗派の違いについて、簡単に整理しておきたい<sup>15</sup>。

アリウス派(Arians)もしくはアリウス主義(Arianism)とは、325年のニカイア公会議で公的に否定され、異端となったアリウス(Arius 250/256-336)の立場を擁護する主張である。主要な神学的問題は、子であるキリストの神的な性質とその父である神との関係性にある。新約聖書はキリストを神性な言葉で語っているが、最高神としての父の二次的な、従属的な存在であるとも語っている。従って、アリウスらは、キリストと神を同一のものに見なすことは、基本的なモノセイズム、つまり一神教(monotheism)の信仰とは矛盾していると主張したのである<sup>16</sup>。因みにモノセイズムの考えは、旧約聖書の冒頭から明確に確立されていると考えられている<sup>17</sup>。結局、自身の主張が異端とされたアリウスは破門され、追放されている。16世紀になり、同じく反三位一体の考えを持った者たちは、ソツツイーニ派と呼ばれるようになったが、ソツツイーニ派とアリウス主義には、その主張内容に違いがある。土屋によれば、ソツツイーニ主義は次のように説明される。

[ソツツイーニ主義]の特徴的な考えは、同じ反三位一体説でも、キリストを神的存在と見るが、父なる神より下位に置くアリウス主義とは違って、キリストを神的存在でなく、人間と見るところにあった。しかしキリストは超自然的に処女マリアから生まれたので、普通の人とは異なる神の子であると考えられた。その他、ソツツイーニ主義は原罪や贖罪を認めず、キリストの諸徳を認め、それにならう人のみが救われるとした。<sup>18</sup>

つまり、ソツティーニ派とは、アリウス主義よりもさらに急進的な考えであり、キリストの神性までも否定している点が特徴的である。

イギリスで最初のユニテリアン派の代表的な人物(創始者)は、反三位一体的な意見のために幾度となく投獄された、ジョン・ビドル(John Biddle, 1615-1662)であった。1644年に書かれた「聖書から導かれた十二の論証」(*XII Arguments Drawn Out of Scripture, Wherein the Commonly Received Opinion Touching the Deity of the Holy Spirit Is Clearly and Fully Refuted*)と題された意見書(tract)が、1647年頃には出版されている。正にタイトルの通り、彼はそのパンフレットの中で、全ての議論を三段論法で「証明」しつつ、精霊の神性をことごとく否定しているのである。例えば第1の論証は、「神から区別されたものは神ではない。聖霊は神から区別されている。それ故(聖霊は神ではない)。｣といった具合である。そのため、1648年に英国議会がジョン・ビドルの異端(heresy)の主張、即ち三位一体の否定は死刑に値するという決議を行った。オリヴァー・クロムウェル(Oliver Cromwell, 1599-1658)の庇護のもと、彼自身と彼のソツティーニ派の信徒たち(Biddelians)は毎週集会を開いていたが、幾度かの投獄と釈放の後に、ついには1662年に投獄死した。

同年、クラレンドン法典(Clarendon Code 1661-1665)の2つ目の法律である「礼拝統一法」(Act of Uniformity 1662)が制定され、『聖公会祈祷書』(*The Book of Common Prayer*)を使用しない非国教的な礼拝が全て違法となった<sup>19</sup>。王政復古以降、これらの法律は、非国教徒を公職から排除し、国教会による体制に寄与するものとなった。『聖公会祈祷書』には、例えば上述のアタナシオス信条(Athanasian Creed)を、クリスマスや復活祭などの祝祭日の早祷(式)(Morning Prayer)の際に唱えたり、三位一体の祝日(Trinity Sunday)が設けられたりしているなど、反三位一体説を主張する牧師が到底受け入れられる内容ではなかった。なお1571年に制定された英国国教会の三十九信仰箇条(Thirty-nine Articles)においても、ニカイア信条及び使徒信条とともに、アタナシオス信条を含む3つの信条は「全面的に受け入れられ、信じられるべきである:というのも、聖書の最も確かな根拠によって証明されうるからである」と明記されている<sup>20</sup>。

17世紀に反三位一体説から大きな影響を受けたのが、詩人ジョン・ミルトンや

哲学者ジョン・ロック(John Locke, 1632-1704)であったとされる。しかしながら、ラテン語で書かれたミルトンの反三位一体説の論文『キリスト教の教義について』(*De Doctrina Christiana / On Christian Doctrine*) が発見されたのは、彼の死後約 120 年が経過した 1823 年のことであり、さらにその論文が出版されたのは 1825 年であった。ジョン・ロックは、1689 年に同じくラテン語で『寛容についての手紙』(*Epistola de Toleratia / A Letter Concerning Toleration*)を上梓し、イギリスにおいては、ユニテリアン派の商人であるウィリアム・ポップル(1638-1708)がそれを英語に翻訳して出版することで、ユニテリアン主義を擁護する主張が展開されている。

18 世紀イギリスの宗教を巡る問題で最も重要なのは、宗教における信仰と理性の関係であったと考える。17 世紀末に上述のジョン・ロックが約 20 年かけて書き上げた『知性論』(*An Essay Concerning Humane Understanding*)では、理性(Reason)と信仰(Faith)は対比されるものとして論じられている<sup>21</sup>。ロックはここで、演繹的に導き出されたものとそうではないものとして、理性と信仰を峻別しているのである。それは、「信仰」には 2 つの要素があり、「一つは「信仰」が神の「啓示」に対する人間の「同意」として成り立つこと、もう一つは、その「啓示」への「同意」としての「信仰」が、人間に神からの「啓示」を提示する人格への「信頼」の上に導かれる」というものであった<sup>22</sup>。

さらにロックは 1695 年に匿名で『キリスト教の合理性』(*The Reasonableness of Christianity*)と題された論文を出版した。デイヴィッド・パークは、「彼の時代の先導的な哲学者であるロックを、神学的にソツツィーニ派とユニテリアン派と同じ陣営に位置づけた」と評している<sup>23</sup>。

#### 4. 18 世紀イギリスのユニテリアン主義とプリーストリ

17 世紀末にジョン・ロックによって提示された、宗教における理性の役割の問題は、18 世紀におけるユニテリアン主義の主要な問題の一つとなる。1689 年の寛容法(Toleration Act 1689)の制定によって、公職からの追放など、4 つのクラレンドン法典(Clarendon Code 1661-1665)に基づいて行われてきた非国教徒への排斥措置が撤回された。しかしながら、その適用は主にピューリタン、即ちカルヴァン派の流れを受け継ぐ宗派に限定されており、カトリック信者とユニテリアン派に

については、依然として蚊帳の外に置かれたままであった。それから約 120 年後の 1812 年の寛容法の改定によって、ようやくユニテリアン派が宗教的な自由を得られるようになった。因みにカトリック信者への排斥措置の撤回については、さらに遅れて 1829 年の「カトリック教徒解放法」(Catholic Emancipation Act)の成立まで待たなくてはならない。

しかしながら、その間、三位一体説に反対する者たちの活動が停滞していたわけではなく、キリストの神性の有無という命題に対して、英国国教会内部では大きな議論となっていた。ニュートンの代弁者として有名な哲学者サミュエル・クラーク (Samuel Clarke, 1675-1729) は、1712 年に『三位一体聖書講義』(*The Scripture Doctrine of the Trinity*) を出版した。その中で、彼はキリストと精霊が神に従属する存在であると主張してユニテリアン主義の思想を展開したために、大きな批判を浴びた。主に長老派、独立派やバプティストの非国教徒らは、1689 年の寛容法の制定以降、各地で学校やチャペルを建設し、分裂や統合を繰り返した。1774 年には、英国ユニテリアニズムの先駆者であるセオフィラス・リンジー (Theophilus Lindsey, 1723-1808) が、上述のサミュエル・クラークが残していた祈祷書を使い、ユニテリアンの集会を開いた。その集会に出席していた会衆の一人が、リンジーの友人であり、今では酸素の発見者として有名なジョーゼフ・プリーストリであった。

批評家デイヴィッド・パークは、プリーストリを「リンジーと並び、第 2 のユニテリアニズムの開拓者」(“Alongside Lindsey emerged a second pioneer of English Unitarianism”) と呼ぶほどである<sup>24</sup>。プリーストリは、ダヴェントリー・アカデミー (Daventry Academy) の学生だった 1760 年代から長年構想していた『自然宗教と啓示宗教の原論』(*Institutes of Natural and Revealed Religion*, 1772-4) を 1772 年から数年掛けて出版した。

以下、その中から注目すべき概念について取り上げたい。批評家ロバート・スコフィールドによれば、プリーストリの 800 ページを超えるこの 3 巻本の大作は、「半世紀に渡って数多く出版されたリベラルな神学者たちの著作の要約であり、ユニテリアン派世代にとっての標準的な解説書になろうとしていた」という<sup>25</sup>。まずプリーストリが繰り返し強調するのは、「知識」(knowledge) と「原則」(principles) の重要性である。正しい知識に基づいて初めて健全な原則が得られるというのであ

る<sup>26</sup>。「常識」(common sense)もまた重要な要素であり、宗教における多くの誤謬の盾、さらには十分な指導者にもなり得ると同時に、それを裁判に喩えつつ、「常識は裁判官にのみ比較し得るものであるが、裁判官は判決を下すための証拠(evidence)や適切な材料(proper materials)なくして何ができようか」と論じている<sup>27</sup>。

プリーストリは、科学に代表される確固たる根拠に基づく考え方、つまりは合理的な考え方の重要性についても説いており、宗教もその例外ではないと主張する。彼は、「要因」(cause)という概念を超越した神の存在という観点から、理性を元に自然の摂理を紐解こうとしており、宗教の教え方は、法律や医学、もしくは科学の教授法とは全く異なっているとも語っている。そして、上述のミシェル・セルヴェの著作でも言及されている、ギリシャの哲学者らによってもたらされた懐疑主義と不信心こそが全ての元凶となり、これらがギリシャ・ローマ中の全ての人々に普及してしまったと嘆いているのである<sup>28</sup>。

また例えば、『自然宗教と啓示宗教の原論』の第2巻では、具体的にギリシャ教父の一人であるエウセビオス(Eusebius of Caesarea, 260/265-339/340)の名前を挙げて批判している。プリーストリが「自然宗教」と呼ぶものこそが、唯一神(one God)を信仰するという原始的な形態であり、つまりはキリスト教のあるべき姿と捉えている。ここで彼が自然宗教、もしくは原始宗教(primitive religion)とも呼んでいるものは、イエスの死後、新約聖書が成立してキリスト教が普及するまでの時代を指している。

ここで、“primitive”の意味についても確認しておく必要がある。*Oxford English Dictionary* では、この語の形容詞の定義として、以下のような説明がなされている。

2. a. Of or relating to the first age, period, or stage of development; relating to early times; early, ancient. **Primitive Church**: the Christian Church in its earliest and (supposedly) purest era.<sup>29</sup>

特にこの“Primitive Church”という表現に限っては、「最初期かつ(恐らく)最も純粋な時代におけるキリスト教会」と定義されており、恐らくプリーストリも、“(supposedly) purest era”という前提もしくはニュアンスにおいて、この表現を用いていると考えられる。

さらに注目すべきは、プリーストリが多用している「体系」(system)という語彙である。但し、この体系という概念については少々注意が必要である。というのも、ドイツに生まれフランスで活動した哲学者ドルバック (Paul-Henri Thiry, Baron d'Holbach、ポール＝アンリ・ティリ・ドルバック、1723-1789)が 1770 年に偽名で出版した『自然の体系』(*The System of Nature or, the Laws of the Moral and Physical World / Système de la Nature ou Des Loix du Monde Physique et du Monde Moral*)で示した「体系」の概念とは全く異なるからである。ドルバック自身は、旧態依然としたキリスト教への宗教批判に留まらず、「理性の放棄」さらには神の奇跡でさえも否定することによって、いわゆる無神論的な主張を展開する。しかし、プリーストリはあくまで理性と信仰心は両立すると確信しており、それがキリスト教の理想的な姿であると考えていた。

プリーストリの言うこの「体系」の概念が象徴的に現れているのが、同様に彼の文献に散見される「原理」(principles)という言葉ではないかと考える。例を挙げると、若い世代の非国教徒の宗教教育の一環として書かれた『自然宗教と啓示宗教の原論』の序論において、彼は大地における植物の成長になぞらえながら、「恐らくあなた方の精神は、宗教的な知識の正しい原理の内に確立するだろう」(“your minds may be well established in the sound principles of *religious knowledge*”)として、原理の重要性を説いている<sup>30</sup>。つまり、常に十分な知識を基盤としているならば、理性によって必ずや真実が導き出せるという確固たる信念がプリーストリにはあったのではないだろうか。

ここで、理性と信仰の関係を、科学的探求の文脈という視野から歴史的に概観することも有益である。プロテスタンティズム、とりわけ 17 世紀のピューリタニズムがイギリスの科学の発展を促したとする、いわゆるマートン・テーゼ (Merton Thesis) と呼ばれる仮説が 1930 年代に発表された。その時代の中心的な役割を演じていたのは、国教会とピューリタンであったというのである。ただ、バーバラ・シャピロ (Barbara J. Shapiro) は、マートン・テーゼにおける「ピューリタンの定義があまりにも広すぎる」として批判した。シャピロによれば、王立協会 (Royal Society) の創立者の一人であるジョン・ウィルキンズ (John Wilkins, 1614-1672) を中心とした、主に広教主義者 (Latitudinarians) と呼ばれる 17 世紀の国教会の穏健派と穏健なピュ

ーリタンらが集まり、科学の促進に寄与したというのである<sup>31</sup>。

その約1世紀後のプリーストリの時代では、事情は少々異なっていた。彼自身も1766年に王立協会の会員となったわけだが、科学によって神の摂理を説明することを主目的としていたものの、理性や合理性を重視するジョン・ロックなどがそうであったように、彼はアリウス主義からソツツィーニ主義(ユニテリアン主義)へと傾倒する。しかしながら、その思想をさらにつきつめれば、理神論や無神論にまで行き着いてしまうものでもあった。たとえプリーストリ自身はそれらの極端な思想を拒絶していたとしても、社会の目からすれば、既存の宗教を脅かすほどの危険性を孕んでいると受け取られていたことは事実であった。

結局のところ、プリーストリが終始追い求めていたものは健全な知識によって形成された理性に基づく体系・原理の構築であり、それは即ち既存のキリスト教をある意味合理的な視点から解釈することであった。そのためには、アウグスティヌスの三位一体説が確立された5世紀初頭よりも前の自然宗教としてのキリスト教、つまりは「原始的なキリスト教」の状態、あるいは原始教会の時代にまで遡らざるを得ないと考えたのではないだろうか。プリーストリは、『自然宗教と啓示宗教の原論』の出版から約10年後の1782年に、さらに過激なタイトルである『キリスト教の墮落の歴史』(*An History of the Corruptions of Christianity*)を出版している。批評家デイヴィッド・パークによれば、彼はこの2巻本の著作の中で「原始教会の信仰に具現化されているように、真のキリスト教とはユニテリアンであり、その教義からの逸脱は全て墮落であることを示そうとした」という<sup>32</sup>。

『キリスト教の墮落の歴史』の結論部分(“The General Conclusion”)には、『自然宗教と啓示宗教の原論』においても頻出していた、キリスト教の“system”という概念への言及がある。いわゆる「キリスト教の体系」を先験的な存在として見なすのであれば、墮落や腐敗の恐れはほとんどなく、人類に善行へと導き、美德と善を持った人々を不死と幸せへと引き上げるため、さらには悪に罪を与えるために神がキリストを遣わした。そのためにキリストは数多くの奇跡を引き起こし、死後に再び復活したという彼の解釈については異論がなさそうである。

しかしながら、注目すべきは、それ以降の記述内容であろう。この“system”の中に怪物のような墮落と腐敗が忍び寄り、既に神によって預言されていたように、真

実からの大きな逸脱が起こり、使徒らが教えられた教義とは全く異なる何かが教会内で引き起こされた、というのである。プリーストリによれば、これら全ての墮落の要因は、異教徒、とりわけ哲学的な側面(“the established opinions of the heathen world, and especially the philosophical part of it”)にあるという<sup>33</sup>。そして彼は、これらの議論の締め括りとして、原始キリスト教信者がキリストの素朴な人間性を信じていたという証拠を 10 の視点から再度まとめることで、『キリスト教の墮落の歴史』をまとめている<sup>34</sup>。

それからさらに約8年後の1790年、プリーストリは『バーミンガム住民への手紙』(*Familiar Letters, Addressed to the Inhabitants of Birmingham*)と題した一連の公開書簡を執筆している。これらはバーミンガムの国教会聖職者スペンサー・マダン(Rev. Spencer Madan, 1758-1836)によるユニテリアン批判、さらにはプリーストリに向けられた個人攻撃に対して反駁したものであったが、ここでも、プリーストリが理想とするキリスト教の姿に言及している<sup>35</sup>。ユニテリアンの信条の正当性を主張する過程で、彼は聖書に記された使徒たちの全ての祈りの言葉が、キリスト自身に対してではなく、彼の父である唯一神に対して向けられていることを指摘する。そしてそのことが「使徒たち、さらには原始キリスト教徒らの共通の言語」(“the uniform language of the apostles, and of all the primitive christians”)であり、「あなた方が祈りを捧げる、三位一体などといったものについては全く知らなかったのだ」(“They knew nothing of a trinity, to which you pray.”)と主張する<sup>36</sup>。

以上のプリーストリの著作から明らかなように、彼は一貫してキリスト教のあるべき姿が、その primitive な状態、即ち「原始キリスト教」(Primitive Christianity)にのみ見いだすことができると確信していた。従って、聖書には一切直接的な記述のない三位一体論や、その教理を説くアタナシオス信条等を堅持する宗派の正当性を否定する。その結果として、彼自身の信念に合致するユニテリアン主義(ソツィーニ主義)を支持したことは、自然の流れであったと言える。

## 5. おわりに

結局のところ、一切の妥協を許さないプリーストリの態度や国教徒の過度な危機意識は、ユニテリアンを含む非国教徒らに対する偏見も相まって、彼自身を破

滅へと導いていく。見方を変えれば、彼の終始徹底した態度が酸素 (oxygen, or “dephlogisticated air”) の発見にも繋がったのかもしれないが、いずれにせよ、『キリスト教の墮落の歴史』を始めとする彼の著作への反発、彼のフランス革命への支持、さらには一般民衆の非国教徒らに対する激しい憎悪の矛先が、結果的に彼個人へと向かうことになり、1791年にバーミンガム暴動／プリーストリ暴動 (Birmingham Riots of 1791 / Priestley Riots) と呼ばれる事件が発生する。その際、自宅、実験室そして教会など、プリーストリが関係する多くの建物が焼き討ちに遭う。その後、1794年に渡米し、二度とイギリスの地を踏むことは無かった。

以上、ユニテリアン主義に関係する歴史について概観し、その上でプリーストリの考える、あるべきキリスト教の姿、即ち原始キリスト教への回帰について考察してきた。しかしながら、彼が残した文献は膨大であり、本稿ではそれらの資料を網羅的に扱うことができなかった。この点については、今後の研究課題としたい。

(本研究は JSPS 科研費 21K00355 の助成を受けたものです。)

<sup>1</sup> Mason, “Unitarianism” 730. しかしながら、歴史的・地域的に様々な信条が存在するため、ユニテリアン主義を一つの確固たる宗派として認識することは困難なようである。

<sup>2</sup> ルター 13. また、引用した『九十五ヶ条の論題』の第1項及び第2項には、それぞれ以下の訳注が付されている:

訳注\*1 『マタイによる福音書』四・一七には「その時から、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え始められた」とあるが、原文は訳出したとおり「悔い改めの sacrament を受けよ」となっている。

訳注\*2 ルターがこの討論の解説に付した序文によれば、「福音的な悔い改めと sacrament としての悔い改めは同じではなく、sacrament が義とするのではなく、それに対する信仰が義とする」。(ルター 41)

<sup>3</sup> 聖書中心主義の立場から、厳密にはカルヴァンはアタナシウス信条そのものは採用してはいなかったが、三位一体論の教理そのものは採用している。この点については、丸山に詳しい(184-205)。

<sup>4</sup> かつてアタナシオスが当時のローマ教皇であったユリウス 1 世に謁見して信仰の告白を行った際に、追放中に書き上げたという信条が捧げられたとする中世の伝説があった。そのため、この信条に 9 世紀頃からアタナシオスの名前が付されるようになったようである (Schaff, Vol. 1, 35)。また、5 世紀のとあるラテン語著書によって彼の名で書かれたアタナシオス信条は、西方教会において準聖書正典的な地位を占めるようになったという。(Kannegiesser 49)

---

<sup>5</sup> Schaff, Vol. 2, 66.

<sup>6</sup> スプロール 54-56.

<sup>7</sup> Jenson 717.

<sup>8</sup> *Encyclopedia Britannica*, “Trinity”.

<sup>9</sup> 宮谷 134-136.

<sup>10</sup> Serveto 33-4.

<sup>11</sup> Serveto 67.

<sup>12</sup> 16 世紀中頃のジュネーヴでは、カルヴァンに反対する運動の勢いが増していたことも、その一因だと考えられるが、いずれにせよ、セルヴェが唱える反三位一体論は、カトリック及びカルヴァンの双方にとって、非常に危険な思想であると認知されていた。カルヴァンとセルヴェとの関係性及び一連の事件の経緯については、砂原「カルヴァンとセルヴェ」に詳しい。

<sup>13</sup> McLachlan 188-190.

<sup>14</sup> McLachlan 191.

<sup>15</sup> English は、この 3 つの主義の違いについて、以下のように簡潔に解説している：

**Arians**, after the Egyptian priest whose doctrines had been denounced at Nicaea; **Socinians**, after Faustus Socinius (1539-1604), author of *De Christo Servatore* (1594), and contributor to the Racovian Catechism (published in 1605); or **Unitarians**, Anglicans and others who accepted the authority of scripture but rejected the Nicene doctrine of the Trinity. (47)

<sup>16</sup> Wiles 37.

<sup>17</sup> スプロール 5-17.

<sup>18</sup> 土屋 21-22.

<sup>19</sup> クラレンドン法典は、Corporation Act 1661、Act of Uniformity 1662、Conventicle Act 1664、Five-Mile Act 1665 の 4 つの法律の総称である。

<sup>20</sup> “VIII. *Of the three Credes*. The *three Credes*, Nicene Crede, *Athanasian Crede*, and that whiche is commonly called the Apostles’ Crede, ought *thoroughlye* to be receaved and beleued: for they may be proued by moste certayne warrauntes of holye scripture.” (Schaff, Vol. 3, 492).

<sup>21</sup> 『知性論』の第 4 卷 18 章の「信仰と理性」(*Faith and Reason*)において、この二者について、ロックは以下のように論じている。

*Reason* therefore here, as contradistinguished to faith, I take to be the discovery of the certainty or probability, of such propositions or truths, which the mind arrives at by deduction made from such ideas, which it has got by the use of its natural faculties; viz. by sensation or reflection. *Faith*, on the other side, is the assent to any proposition, not thus made out by the deductions of reason; but upon the credit of the proposer, as coming from God, in some extraordinary way of Communication. This way of discovering truths to men we call revelation. (Locke, Vol. 4, 417).

<sup>22</sup> 加藤 373.

<sup>23</sup> Parke 37.

<sup>24</sup> Parke 47.

<sup>25</sup> Schofield, *The Enlightenment* 172.

<sup>26</sup> Priestley, *Institutes*, Vol. 1, iii-xxii.

---

<sup>27</sup> Priestley, *Institutes*, Vol. 1, xxvii.

<sup>28</sup> Priestley, *Institutes*, Vol. 1, 5-9.

<sup>29</sup> “primirive, n. and adj.” *OED Online*.

<sup>30</sup> Priestley, *Institutes*, Vol. 1, iii.

<sup>31</sup> Shapiro 16-41.

<sup>32</sup> Parke 48.

<sup>33</sup> Priestley, *An History*, Vol. 2, 440-441. 2部構成になっている結論の第1部には、「不信心者、そしてとりわけギボン氏に宛てた考察 (“Considerations addressed to Unbelievers, and especially to Mr. Gibbon.”)」という副題が掲げられている。歴史家エドワード・ギボン (Edward Gibbon, 1737-1794) が、1776年に『ローマ帝国衰亡史』(*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*) の第1巻を、1791年には第2巻及び第3巻を刊行している。ギボンは自著の中で、ローマ帝国衰退の一因はキリスト教の浸透にあると主張したため、プリーストリが敢えて彼を名指しで批判しているのである。例えばギボンは、コンスタンティヌス帝の「未熟な」宗教政策を批判し、「アリウスを擁護した一方で、アタナシオスを迫害し、それでもニカイア公会議をキリスト教信仰の防壁、彼自身の統治の特有の栄光であると考えていた」などと評している。(Gibbon 338) その後もギボンとプリーストリの批判の応酬が続いたようである。(Schofield, *The Enlightened* 221-222)

<sup>34</sup> Priestley, *An History*, Vol. 2, 485-489.

<sup>35</sup> 18世紀末のパーミンガムでは、プリーストリが在住した約10年間に非国教会の礼拝所が次々と作られるなど、体制側である国教会の危機意識が強まっていた。(杉山 131-132)

<sup>36</sup> Priestley, *Familiar Letters*, 129.

< 参考文献 >

- Biddle, John. *XII Arguments drawn out of the Scripture; Wherein the commonly received Opinion touching the Deity of the Holy Spirit, is clearly and fully refuted.* 1647.
- Britannica, The Editors of Encyclopaedia. "Trinity". *Encyclopedia Britannica*, 21 Oct. 2021, <https://www.britannica.com/topic/Trinity-Christianity>.
- English, John C., "The Duration of the Primitive Church: An Issue for Seventeenth and Eighteenth Century Anglicans." *Anglican and Episcopal History* 73.1 (2004): 35-52.
- Gibbon, Edward. *The History of the Decline and the Fall of the Roman Empire.* vol. 3.
- Jenson, Robert W. "trinity." *The Oxford Companion to Christian Thought.* Eds. Adrian Hastings, Alistair Mason and Hugh Pyper. Oxford: Oxford UP, 2000, pp. 715-719.
- Kannengiesser Charles. "Athanasius." *The Oxford Companion to Christian Thought.* Eds. Adrian Hastings, Alistair Mason and Hugh Pyper. Oxford: Oxford UP, 2000, pp. 47-49.
- Locke, John. *An Essay Concerning Humane Understanding.* 4 vols. London: Awnsham and John Churchil, 1700.
- Mason, Alistair. "Unitarianism." *The Oxford Companion to Christian Thought.* Eds. Adrian Hastings, Alistair Mason and Hugh Pyper. Oxford: Oxford UP, 2000, pp. 730-732.
- McLachlan, H. *Socinianism in Seventeenth-Century England.* Oxford: Oxford UP, 1951.
- Parke, David. B. *The Epic of Unitarianism: Original Writings from the History of Liberal Religion.* Boston: Skinner House Books, 1985.
- Priestley, Joseph. *Essay on a Course of Liberal Education for Civil and Active Life.* London: Pearson and Rollason, 1765.
- . *Familiar Letters, Addressed to the Inhabitants of Birmingham.* Birmingham: J. Thompson, 1790.
- . *An History of the Corruptions of Christianity.* 2 vols. Birmingham: Piercy and Jones, for J. Johnson, 1782.
- . *Institutes of Natural and Revealed Religion.* 3 vols. London: J. Johnson, 1772-1774.
- "primitive, n. and adj." *OED Online.* Oxford University Press, June 2021. Web. 20 August 2021.
- The Racovian Catechisme wherein You Have the Substance of the Confession of Those Churches, which in the Kingdom of Poland, and Great Dukedome of Lithuania, and Other Provinces Appertaining to that Kingdom, Do Affirm, that No Other Save the Father of Our Lord Jesus Christ, is that One God of Israel, and that the Man Jesus of Nazareth, who was Born of the Virgin, and No Other Besides, Or Before Him, is the Onely Begotten Sonne of God.* Amsterledam: Broocer Janz, 1652.

- Schaff, Philip. *The Creeds of Christendom With a History and Critical Notes*. 1931. 3 vols. Michigan: Baker Book House, 1985.
- Schofield, Robert E. *The Enlightened Joseph Priestley: A Study of His Life and Work from 1773 to 1804*. Pennsylvania: The Pennsylvania State UP, 2004.
- . *The Enlightenment of Joseph Priestley: A Study of His Life and Work from 1733 to 1773*. Pennsylvania: The Pennsylvania State UP, 1997.
- Serveto, Michael. *The Two Treatises on Servetus on the Trinity: On the Errors of the Trinity, Seven Books, MDXXXI, Dialogues on the Trinity, Two Books, On the Righteousness of Christ's Kingdom, Four Chapters, MDXXXII*. Trans. Earl Morse Wilbur. Harvard: Harvard UP, 1932.
- Shapiro, Barbara J. "Latitudinarianism and Science in Seventeenth-Century England." *Past and Present* 40 (1968): 16-41.
- Wiles, Maurice. "Arianism." *The Oxford Companion to Christian Thought*. Eds. Adrian Hastings, Alistair Mason and Hugh Pyper. Oxford: Oxford UP, 2000, pp. 37-38.
- 加藤節『キリスト教の合理性』、岩波文庫、2019
- ジョン・ロック「人間知性論」、『世界の名著 27:ロック ヒューム』、大槻春彦訳、中央公論社、1968
- 杉山忠平『理性と革命の時代に生きて—J. プリーストリ伝—』、岩波新書、1974
- R. C. スプロール『三位一体とは何か』、三ツ本武仁訳、いのちのことば社、2018
- 砂原教男「カルヴェンとセルヴェ」、『待兼山論叢』、第5号史学篇、71-91、1972
- 土屋博政『ユニテリアンと福澤諭吉』、慶應義塾大学出版会、2004
- マルティン・ルター『宗教改革三大文書 付「九五箇条の提題」』、深井智朗訳、講談社学術文庫、2017
- 丸山忠孝『カルヴェンの宗教改革教会論—教理史研究』、教文館、2015
- 宮谷宣史『アウグスティヌス』、清水書院、2013

